
軍事オタクが地獄を逝く

Omega11

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軍事オタクが地獄を逝く

【Nコード】

N5933S

【作者名】

Omega11

【あらすじ】

主人公は、平野がスニーカーで逃げ出すレベルの軍事オタク。某国で旧東側火器を撃ちまくっていた所、神の陰謀で死んでしまう。そんな主人公が女体化して例の漫画でドンパチします。

プロローグ（前書き）

主人公チート。嫌いな方は回れ右。未熟者ですがどうぞよろしく。

ブローグ

俺「アールピージィー！」

ノリノリでRPG-7の引き金を引く俺。

俺は今、頑張つて貯めた金を使って、とある国の射撃場に来ていた。
そして……

カチツ……シュポツ……ポテツ……

現地の教官「オイ、逃げ……」

……え？

ドォーン！

と、言うわけでいきなりだけど、俺、死んでしまいました。

……あれ？天国か？ここは

「残念ながら違つぞ」

かみがあらわれた！ どうしますか？

1・たたかう

2・にげる

3・じゅもん

よし、せっかくだから俺は3を選ぶぜ！

「くぁw背drftgy富士子1p:~!」

「・・・気でもふれたか？」

「いや、大丈夫だ、問題ない。で、ここどこ？天国じゃないってことは、地獄？」

「天界だな。ワシの住む空間で、一応天国とは違うのだ。」

「・・・で、何で俺がここに？」

「いや、実はお主に行ってもらいたい世界があつての」

「ふうん・・・で、どこに」

「漫画の世界じゃよ。何ていったかの、んゝ確か・・・学園黙示録？そんな名前じゃ」

「・・・」

ええゝ・・・やだよあんなバイオハザード世界。行くなら俺はギヤルゲのs

「そういつと思つての、じゃあ何か能力をつけるといふのでどうじゃ？」

「・・・じゃあそれで」

「何がいいかの？」

「映画とかゲームの登場人物とか、GTAのチートみたく車とか武器を念じれば無限沸きで」

「良からう、他には？」

「気前いいな」

ううん・・・あとは女体化とか？

「よし、決まったところでさっそく行ってもらうかの」

・・・と、いうわけで死んで早々俺の第二の人生は始まってしまった・・・

第一話〜開幕〜（前書き）

弱音ハクは俺の嫁。だから外見だけ弱音にしたよ。ただそれだけ。螺刹仁様ごめんなさい。でも弱音が好きなのでやらかしてしまいました。そのほかハク好きの方々、ごめんなさい、ごめんなさい。

第一話　開幕

199X年、世界は核の炎に・・・

じゃなくて。

生まれたはいいんだが、普通、赤ん坊というのはリノリウムの天井で、清潔なシーツにくるまって、ベッドで寝転がっているものじゃないか？そして今の俺はというと・・・

1・リノリウム↓床主市の灰色の空

2・清潔なシーツ↓薄汚れたタオル

3・ベッド↓みかん箱

・・・転生早々命の危機だ・・・とりあえず泣こつ喚こつ。

「おぎゃーおぎゃー」

「まあ、大変！こんなところに赤ちゃんが！」

神の差し金か、思いのほか早く見つけかけてくれた。

「かわいい女の子なのねー、なんで捨てるのかしら」

・・・女？あの神マジでやってくれたのか。拾ってくれたのは30前半くらいの女性だ。

「白髪に、赤い瞳。アルビノかしら？それにしてもそれだけで捨てるなんて・・・世の中荒んだわね・・・よし、もう大丈夫。私が育てあげるわ」

いい人だなあ・・・まあ、お世話になるとしよう。

その後俺は順調に成長し、小学校へ。白髪の件でいじめられることもあったが、基礎体力を付けようと、トラック走り回ったり、懸垂したりで、ガン無視を決め込んでいたので、特に気にはならなかった。

中学ではそういうのを気にする人はいなかった。そして、外見が弱音ハクに酷似していることが判明。つまり男が言い寄ってくる。むしろそつちをあしらうのに困り、笑顔で「ノー」と言える理想の日本人誕生。

そして、物語は全寮制私立高校、藤美学園へ・・・

.....

T o B e C o n t i n u e d .

第一・五話　くいままでのあらすじ（前書き）

冥土く冥土くメイドのみやげく……じゃなくて、焦り気味で投稿した一話の補完用。あと主人公の手記風にしてみました。

第一・五話　くいままでのあらすじ

手記 - ？ - 生い立ち

『200X年、4月5日。

ここでの生活も落ち着き、日記を書いても怪しまれない――』

「うん・・・駄目だなあ」

途中まで書いていた日記のページを切り捨て、ゴミ箱に放り投げる。

「文面が堅すぎるな・・・」

それに誰かに見られるとな・・・よし。

『高校進学を記念して、日記を書くことにしました。――』

「よっし、上々」

このままで書いていこう。

『昔のことから振り返っていききたいと思って、知っている限りの昔から、書いていきたいと思います。私が生まれた、正確には拾われたのは、2月ごろ、空が灰色の寒い日だったそうです。道端に捨てられていた私を、お母さん、左近夕菜さんさこんゆきなが拾ってくれました。そして私は、雪の降りそうな寒い日に拾われたで、雪穂ゆきほ、という名前を頂きました。この名前を付けてくれたのが、私のお父さん、左近和武さんかずたけでした。母と父は職場恋愛で、父は今も現役の幹部自衛官です。――』

「ふう・・・今日はこれ位でいいかな・・・」

それにしても・・・やっぱり女言葉は慣れないなあ・・・やっぱり誰にでも敬語でいいかな？

手記ー？ー調査報告ー

『「学園黙示録」時空での調査結果について』

・時空内では、この作品について、一切の記述が無い。

・また、私の姿の原型たる、弱音ハクもまた、VOCALOID界限より姿を消している。

・小室孝、井豪永、宮本麗、平野コータ等の登場人物を確認。その他の登場人物についても、ほぼ実在は確実とされる。

・歴史なども、特に現実と変わるものは無い。――

「ううーん・・・」

こんなものまとめて何になるんだ、っていわれても、そういう性格なんだよね・・・しょうがない。

疲れたなあ・・・明日は入学式だし、早く寝よう。

第二話〜回想〜（前書き）

ゾンビハザードはないぞよ、もうちょっとだけ続くんじゃない。

—— 神（5,900歳）

第二話　回想

「ええ、それでは、新入生の皆さんは、はい、藤美学園生徒としてですね、まあ、自覚をね、持ってますね、ええ・・・」

校長先生の文節ごとに「ね」を付けてるような祝辞を聞くのもこれで二度目。私は2年B組・・・そう、小室孝達、作品の主要キャラ達がいるクラスだ。クマの出来た目を閉じながら、去年の出来事を思い出してみる。・・・zzzzzzzz・・・

　　一年前、1 - B

「・・・あの・・・TK-X、どうなると思います?」

「・・・はい?ええと・・・??」

「だから、あの、陸自の74式、90式戦車の後継になる、TK-Xですよ」

「ああ、それはもちろん・・・ってえええ!？」

「・・・あの、私何か変なこといいました？」

「い、いやそうじゃなくて・・・」

「あ、申し遅れました。私は左近雪穂と申します。どうぞお見知りおきを」

「ぼ、僕は、平野、コータ・・・です」

「それで、TK-Xの話は・・・」

「すう・・・」

「オイ、左近」

「ふえ? ああ、すみません・・・」

「校長先生の話が長くて、眠いのはみんな同じだ。色々忙しいのは分かるが、寝るな」

・・・先生に怒られてしまった。しかし、校長先生の話は先生方も嫌いなものね。

とはいえ、眠くて仕方がない。もう少し、もう少しだけ、休んでもいいよね、パトラッシュ・・・

く所変わって、剣道場前・・・く

「面！胴！」

「やああああっ！」

「せいやああっ！」

凄い熱気だ。剣道場に来てみたはいいけど、これに割ってはいる気にはなれないなあ・・・

「そこで何をしているのだ？」

「・・・！」

この古風な喋り方！そしてこのみゆきもゲフンゲフン・・・もとい、ハスキーボイスは！

「毒島先輩？」

「私のことを知っているのか？」

「ええ、剣道部の次期主将最有力ですから」

「そうか・・・で、入部希望か？」

「あ、はい！よろしく願います！」――

「・・・・・・・・・・」

目を覚ますと、さっきの先生があきれた目でこっちを見ていた。視線が痛い。

「ご、ごめんなさい・・・」

「もういいよ・・・」

もういいってことは寝てもいいってことですよ、ね、そうですよ、ね。じゃあ、また夢で逢いましょう・・・

「すう・・・」

「駄目だこりゃ・・・」

第二話〜回想〜（後書き）

と、いうわけで、スクデドキャラとの接点を（ある程度）作っておきました。ついに次回！雪穂さんの活躍が・・・！あるかもしれないね。

第三話 All Ghillied Up (前書き)

「ステンバーイ・・・ステンバーイ・・・オーケーイ・・・ゴウッ
ッ！」

こんな街中でギリースーツ着ても意味ないですよマクミラン大尉。

第三話 All Ghillied Up

多分・・・今日だ。

そんな気がしたので今日は学校を休んでしまいました。念のため、神からもらった能力を使って、M24とマクミラン大尉を召喚して寮の屋上で校門を見張ってみたは良いんですが・・・

「スタンバアーイ・・・」

大尉がスコティッシュな英語しか話していない。個人で行ったのはあるとき、死んだときが初めてだけど、ツアー自体はよく行っていたから、英語もある程度わかるし、問題はないけどね。

「・・・・・・・・と、いうことでもう五時限目も半ば、そろそろ 奴らが校門前に・・・・・・・・よし、来た。」

「よし、落ち着いて撃て。プライス。訓練を思い出せ。大気中の湿度と風力が弾道に与える影響・・・」

「・・・ああ、あと問題がもうひとつ。なぜか「プライス」と呼ばれる・・・・・・・・どういうこと？」

「よし、ゼロイン」

まあ、いい。落ち着いて引き金を絞る。

ポンッ

手前味噌ながら、見事に 奴ら の眉間に7mmくらいの穴が開いた。

「ビューティホー・・・」

M24は、サプレッサーと消音用の弾薬を使うことで、極限まで音を抑えることが出来る。まあ、こんな間抜けな音になるけど。

「ともかく、これで校内に 奴ら は・・・」

校内放送の回線をここまで引いておいたので、ヘッドホンに耳を傾ける。

『ぎゃ嗚呼ああ！死ぬ！ああああ！助け・・・』

「クソッ・・・どこから沸いてきたんだ・・・」

大尉が毒づく。どうやら敵はすでに他の場所から侵入していたらしい。残念・・・

「気を落とすな、プライス。お前の責任じゃない。」

ありがとう、大尉・・・でも私はプライスじゃないし、こんな都市部でギリは意味ないよモリゾーさん・・・

「さてと・・・侵入を防げなかった以上、小室君達と合流して、モブキャラを助けたいんですが・・・」

「よし、ではまずどこに向かう？」

「保健室に・・・あ、でも途中で現国の脇坂先生を倒しておきましょう」

「分かった」

会話の後、武器をサプレッサー付のM4A1に変えて、懸垂降下口ラベリングで一気に寮を滑り降りた。

）孝side（

「永！」

「こいつなんで・・・こんなに力が・・・」

麗を助けようとして、脇坂を羽交い絞めにした永が、噛まれかけている！早くしないと永が・・・！

「くそ！永からはなれ・・・」

スコツ・・・ドサツ

「・・・？」

脇坂・・・だった 奴ら から、力が抜ける。

「おい、永、怪我は・・・？」

「・・・」

永がもう動かない 奴ら を調べている。

「こいつ・・・狙撃されてる・・・」

「狙撃？誰に？」

そもそもここは日本の学校で・・・

「さあ、な。とにかく助かったんだ。急ごう。」

「ああ」

〈孝side out〉

「グリーンナイツ・・・」

「危なかったですね。では、保健室へ」

「ああ」

ー保健室ー

保健室から、肉を叩き潰す音が聞こえる。

「岡田！許せ！許してくれ・・・！うつ、うつ・・・」

「うーん・・・これと、これと、あと、あれも・・・」

「先生、まだですか！？早く、あ・・・」

彼の・・・石井の目に映ったのは窓を割って侵入しようとする奴ら。

「もう・・・駄目だ・・・」

ガラッ

扉が開く。

「・・・！？」

彼の視界に入っただものは、彼の理解を超えていた。

彼の目に入っただのは・・・

・・・モリゾー。もしくは、ムックの色違い。

「・・・は？」

そのモリゾーが、窓に集まっていた 奴ら を撃ち殺す。

極限まで高まっていた彼の精神は、そこで事切れた。

―保健室― out ―

「こつちもぎりぎり、でしたね」

「あそこまでがんばっちゃだめやん・・・」

「・・・は？」

大尉が・・・日本語を・・・！じゃなくて、『It's a bloody convention out there』（向こうに集まってやがる。）』か。それにしても紛らわしい・・・ってつまり、

窓を見ると、大尉の銃撃で殺しきれなかった 奴ら が！

「やるかなあ・・・」

パパパ、パパパ、パパパ、パパパ・・・

サプレッサーの間の抜けた音を聞きながら、5・56mm弾を3点射で 奴ら の頭部に浴びせる・・・

あらかた片付けたころ、窓からある人物が飛び込んできた。

「はあ、はあ、間に合わ・・・無かつ・・・た？」

「あ、毒島先輩、こんにちは」

「あれ、左近君？何故ここに？それに横にいる奇妙な格好の人物は？」

「・・・」

なんて説明しよう・・・獵師？それでいいやもう。

「私の父の友人で、イギリスで獵師をしてるんです。今日は私のお見舞いに来てくれて・・・」

「それで、その格好なのか・・・」

おお・・・この嘘が通るって・・・毒島先輩やつぱり少し天然なんじゃないかな・・・
私も銃持って都市迷彩の戦闘服に編み上げブーツとか履いてるんだけど・・・
アーバンカモ

「とりあえず、どこに行きましょう？」

「うーん・・・」

『キヤアアアアアアアア！』

・・・！どこから悲鳴が！あの声は・・・

「高城さん!？」

「知り合いなのか!？」

「クラスメイトです!」

「行こう!」

「はい!」

私、大尉、毒島先輩、鞠川先生、石田君の5人で、声のしたほうに駆け出した。

「嫌ああああアッ!」

到着した頃には、高城さんのドリルが天を・・・じゃなくて、奴らの頭を貫いていた。小室君達も、この声を聞いて既に駆けつけていたようだ。井豪君もまだ生きている。だけど、奴らは、まだうようよいいる。

「大尉!」

「分かっている!」

「右は任せろ!」

バキッ!、ボゴッ!グチャッ!

バスッ、バスッ、バスッ・・・

パパパパパパパ・・・

さて、と・・・

「皆さん、怪我は・・・」

「それ・・・M4A1じゃないですか！左近さん！いったいどこでいつ！？それにそのギリースーツの人は？」

「う・・・」

平野君がいるのを忘れてた・・・仕方ない・・・

「実は・・・」

少女説明中...

「そんなことが、あるんですか・・・？」

「ちょっと待ってて」

頭の中で、M92Fを思い浮かべる・・・

ガチャッ

第三話　All Ghillied Up (後書き)

止めるところが、分からなかった・・・あと、チートを使いすぎると、貧血でしばらく動けないという設定を追加しました。

あと、銃の擬音表現が分かりづらくてすみません・・・

第四話〜One shot、One kill〜（前書き）

やっぱり一日一話投稿しないと何かよく分からなくなるね・・・

第四話 One shot, One kill

と、いうわけで。職員室に到着しました。

ここでバスの鍵を取って校外へ脱出・・・らしいんですが・・・

「敵が多すぎる・・・」

どこを見渡しても 奴ら だらけ。それこそ映画のバイオ4レベル。ここまで多いと誰かが敵を引き付けておいて、というか・・・うん。それしか無い。

「私が別行動で敵を引き付けましょう」

「駄目だ！・・・まだ、死にたくは無いだろう？」

「心配ないですよ。管理棟の屋上から援護するだけです」

「しかし・・・！」

「じゃあ、これを。準備が出来たら連絡してください」

無線機を渡し、有無を言わずその場から大尉と一緒に立ち去る。

「左近君！」

「毒島先輩、大丈夫ですよ。左近さんには能力もありますし」

「・・・分かった。私は、彼女を信じよう。行こう」

くそして、管理棟、屋上く

バスッ、バスッ、バスッ

「狙撃ポイント確保。行動目的は陽動なので、サプレッサーは外しましょう」

「了解」

狙撃なので、銃を大尉と同じM21に変える。

カアアーン……

どうやら階段の手すりにさすまたをぶつけてしまっイベントが発生したらしい。

「すまない左近君！ 奴らに見つかってしまった！」

「ええ、ここからも聞こえました。すぐに援護します」

よし。やるか。

ガアーン……ガアーン……ガアーン……

誤射しないように気をつけながら、確実に倒してゆく……よし、

全員乗った。死傷者もなし。じゃあ、そろそろ……

「助けてくれ！」

・・・ああ、紫藤教ご一行の事を忘れてた。・・・一瞬照準線レティクルを紫藤の頭に合わせるが・・・やめた。宮本さんの言葉を借りるなら、『殺す価値も無い』といった所か。

ドオン！

扉の前に設置しておいたクレイモアが起爆する。

只く早く逃げろ！ここは俺がなんとかする！

只さんの最期の叫びが・・・そろそろ潮時かな・・・

「ああん！」

変な声で、男子生徒の一人が転倒する。

「センサー、アシクビラクジキマシター！」

このままだと原作どおり喰われてしまうけど、そうはさせない！

「大尉、彼を助けます！援護してください！」

「任せろ」

ロープを使って一気に一階まで滑り降りる。武器は置きっぱなしだ。でも、大尉の援護なら心配は無さそうだ。転んだ生徒のところまで駆け寄って、抱え起こす。顔を蹴られるのは防げなかった。かわいそうに……

「あ、ありがとう……」

「お礼は後で。今はバスに急ぎましょう」

「はい……」

さて、マクミラン大尉は……

「大尉、もういいですよ」

応答が無い。というかこの周波数に反応がなかったので、もう、プリピャチに帰ってしまったんだろう。今頃本家本元のプライス少尉に起こされてるかもね。

「左近君！無事か！」

「ええ、大丈夫です」

「さっきの御仁は？」

「大尉はあるゲームから呼び出していて、今頃はゲームに戻ってますよ」

「おや？お父上の友人で、猟師をしてるのでは無かったのか？」

「ははは・・・」

まだ信じてらっしゃったんですかその嘘・・・

「では、行きましょう。鞠川先生！」

「もう人じゃない・・・もう人じゃない！」

バスが急加速し、 奴ら をはね飛ばす。

そしてバスは街へ向かう・・・

くそして、街へ

「こちらは床主市です！現在私達は 殺人病 と呼ばれる感染症による混乱に加え、忽然と現れた謎の武装組織と米軍と思しき集団の戦闘に巻き込まれており、今もなお銃声が・・・あ！あっち！カメラあっち向けて！」

カメラがキャスターの指差した方向にカメラを向ける。

「戦車です！上空には軍用ヘリの姿も見えます！」

ドゴォン！

「戦車が発砲しました！」

「もうここも危険だ！逃げるぞ！」

「もうここは危険です！われわれ報道陣も退避します！・・・皆さん、幸運を」

・・・世界は常に取り替る。誰が知らずとも、確実に、絶えず取り替る続けている・・・

第四話 One shot, One kill (後書き)

ネタを少し多めにしてみました。あと、これから原作のストーリーから離れ、オリジナルの展開に入ります。これからもこんな感じで良いでしょうか？もしよろしければ感想に一言くっつけて送信していただければ嬉しいです。ではまた。

Extraよくわかる、解説（前書き）

サブタイは某平成教育学院のを脳内再生して下さい。

現時点で、原作では死ぬはずで、今生きてるモブの紹介、左近家の紹介、

そして、四話ラストで出した米軍と謎の武装組織の暫定的な設定を、超展開すぎてワロタwwwと、いう人へ。

Extraよくわかる、解説

左近家

主人公：左近雪穂さつきゆきほ

年齢・役職：転生前30代 現在17歳 高校二年 図書委員

性格：温厚で、周りの人には心の中でも敬語を使うように心がけている

しかし、銃を持つと、人間感情を押し殺した冷静な性格に変化する。兵器を見ると双眼鏡を取り出して、細かに観察しだす。

容姿：一話記述のとおり、弱音ハクに酷似している。年齢以外は大体公式準拠。

特技：海外ツアーで培った射撃技術・酒豪（自称）。ウオツカをストリートでグビグビ呑める。（らしい）

能力：転送能力。次元も飛び越える。でも基本的に銃器・近代兵器しか使わない。そして使いすぎると貧血を起こす。

身体能力は一話で記述したとおり、持久力と腕力が高め。高校入ってからハイポートとかがしていた。平野と同じ軍事オタだが、戦術、戦略、政治規模の話題まで、軍事が絡むならどんな事でも、広く、それなりに深く知っている。

趣味：軍事全般 射撃（最近は一アガン） アニメ・漫画・ゲーム
etc... 父の酒をこっそり呑むこと

左近父：左近和武

さこんかずたけ

年齢・役職：45歳 陸上自衛隊3等陸佐 戦車教導隊第2中隊長
防衛大学校第43期

性格：豪放磊落。そのくせ現実をしつかりと見据えており、「パツ
トンの再来」と言われる。彼の指揮する第2中隊は、ある作戦の随
伴戦車隊に選ばれるが・・・

容姿：身長170cm、体重65kg。引き締まった体躯で、紳士
然とした風貌で、口ひげがある。

特技：防衛大時代は、弁論部所属で、自衛隊、在日米軍、日本攻撃
による世界経済の混乱の三重の抑止力論を唱えていた。演習では、
大胆かつ巧妙な配置で毎回勝利を収めている。射撃も得意。酒豪。
日本酒好き。

左近母：左近夕菜

さこんゆいな

年齢・役職：43歳 専業主婦

性格：おっとりしていて、鞠川先生がそのまま年取った感じ。和武
とは高校時代の後輩で、その縁が元で結婚。

容姿：身長163cm、体重45kg。家族で旅行に出かけると、
父が通報されかけるくらいに若く見える。

特技：少し医学知識があり、応急処置程度なら可能。

生存モブキャラ

石井：勇者。これ以上の説明は必要あるまい。ただし今作では勇者から村人Aに降格。

卓造一行：首にタオル引っさげた卓三達。さすまたをぶつけたのもこの内の一人。

アシクビヲクジキマシター：アシクビヲクジータウエニ、シドーセンセーニカオヲケラレマシター！

・・・あと、手島先生達も、すぐには死ななかった。

これからの展開

プランB

（　。　A　）あ？ねえよ、そんなもん

じゃなくて・・・

米軍的な何か↓中央即応集団

武装組織↓アルカイダみたいな反米国際テロ組織（バックに死の商

人)

現時点での構想

主人公一行

紫藤と決裂、別行動。

(石井、卓造一行、アシクビ(r yは付いてくる)

リカさん家

原作どおりの武器+ある方からの提供で、特戦仕様のM82A1、M4A1、MINIMI、そしてサムライエッジ。

ホロサイトなり、バーティカルグリップなり、ごてごて付けたいと思います。

とりあえずここまで

Extraよくわかる、解説（後書き）

前回のよつに感想の一言にお気軽にどうぞ。

6 / 11 改

復活してからの初仕事はこれとは・・・

第五話〜Death From Above〜（前書き）

さて、米軍的なのが戦ってるのは、川向こうなので、ストーリーに直接かわるのはもう少し後です。

第五話　Death From Above

二ヶ月前 - 03:05 - 2月某日、九州北部―

草木も眠る丑三つ時。そんな中を、行軍する部隊があった。

その数、約一個師団以上。ある演習に参加するべく九州の国道を移動していた。

その演習の目的は、報道統制を含む大規模な防衛戦、上陸する仮想的の阻止である。

そのためか、移動する部隊には、戦車が多かった。

数の上でいまだ陸自の主力である、74式戦車。本州では戦車教導隊にしか配備されていない、90式戦車。

それに混じって、三輦の10式戦車も見られる。10式には、流星のマークが描かれていた。

つまり、戦車教導隊第2中隊、機甲科隊員の憧れ、精鋭中の精鋭である。

よく見れば、他の戦車にも、教導隊のマークが描かれている。10式の近くの90式は、同じ第二中隊と第五中隊、

74式には第三、第四、他の74式より主砲が短く見える74式には、第一中隊のマークがあった。

そして教導隊は、現地の第四戦車大隊と臨時の連隊を編成していた。空には、陸自のCH-47J、UH-1J、OH-1、UH-60JAも見える。

「深夜に展開する大部隊、まるで『戦国自衛隊』ですねえ・・・ふああ・・・」

10式の砲手が、あくびとともにつぶやく。

「だとしたら、飛ばされるのは、間違いなく俺たちだな」

それに答える車長。

「どうしてです？左近三佐」

「異世界に飛ばされるのは、その時の最新式って相場が決まってるんだよ」

「ああ、確かにそうですね・・・ああ、眠い・・・」

機甲科隊員の他愛もないやり取りが続く。

異変が起きたのは、そのときだった。

突然、地面が歪み、足元をすくわれる。

が、それはすぐに収まった。

だがその後、隊員達は、ありえない光景を目撃する。

「教導隊が・・・消えた・・・？」

「おい、補給物資もないぞ！」

「上空のヘリはどこに行つたんだ！」

「なんばおこつとつとね・・・」

後日確認したところによると、宇都宮駐屯地、習志野駐屯地でも、演習中に装備、隊員が全て失踪する事件が発生した模様、防衛省が調査を進めている・・・

数時間前 - 19:00 - 藤美学園遠征バス内

「つまり、今の我々には、リーダーが必要なのです！」

「で、候補は一人だけ、つてわけ？」

「そのとおり。私は教師なのです、それだけでも資格の有無ははっきりしています」

・・・この人、自分で今までの価値観は通用しないとか言ってたと思うけど・・・

「どうですか、皆さん。私なら、問題がおきないように、手を打てますよ！」

パチパチパチパチパチ・・・

周りの生徒たちが立ち上がって拍手をする。

「と、いうわけで、多数決で私がリーダーということで・・・」

ガァン！

「嫌よ！こんな奴に従うなら死んだほうがましよ！」

宮本さんがドアを蹴破る。

「おい、麗、落ち着けて。街に着くまで我慢するだけだろ」

「放して！孝！」

二人がバスの外に出る。・・・って、不味い！

「鞠川校医！」

「えっ！？」

突然現れたバスがトンネルの真ん前で横転し、トンネルを塞ぐ。

「大丈夫か、小室君！」

「はい、何とか！では、明日、東署で午後七時に、落ち合いましょう！」

「分かった！」

ああ・・・防げなかった・・・まあ、無事だろうけど・・・

――夜は明け、小室君達と別れたときの事が夢に出た。

一夜明けても、相変わらず紫藤先生が演説している。まるで新興宗教みたいだと、毒島さんが漏らしていた。

視線を横に向けると、何やら高城さんと平野君で話し合っている。

原作どおり、紫藤先生と離れて、南リカさんのお宅に行くんだろう。

そう思って、また一眠りしようと、座席に身を預けた時、

『のう、聞こえるかの』

・・・約十七年ぶりの声が聞こえた。

「なんでヘッドセットに？念話でも使ってくださいよ《神様》？」
なるべく嫌味っぽい声で言う。

『そう言うな。今回は主の能力の件で、変更点があつての、それを知らせに来たのだ』

「変更点？」

『うむ。実は、ワシの力がなぜか勝手に使われての・・・力が大幅に減衰してしもうた』

「それで、何の影響があるんです？」

『うむ、主がその世界で 奴ら とか呼ばれてる連中を倒すたびに、ある程度の召喚が出来るようにして置いた』

それなんてキルストリーク？・・・まあいいや、サア行くか！

「わざわざどうも」

『気にするで無い。では、またの』

じゃあ、4人で補給物資、7人でヘリ、11人でA C - 130でいいかな。

よし。今度こそ寝よ・・・

「どうしたのです、皆さん。ここは一致協力して・・・」

「ご遠慮するわ、紫藤先生。私たちには、私たちの目的があるの」

「ほう・・・」

「まあ、あなたたちがそう決めたのならどうぞ自由に。なにしろ日本は自由の国ですからね・・・しかし・・・」

「あなたは困りますね、鞠川先生」

「うゆえっ？」

鞠川先生がうめく。

「現状で医師を失うのは、マイナスが多すぎます。どうです、残ってもらえませんか？」

紫藤先生がこちらに歩み寄る。

「こちらにも、あなたを頼りにする生徒が大勢いるので・・・」

バスッ！

平野君の発射した釘が、紫藤先生の頬をかする。

「ひ、平野君・・・」

若干声が上ずっている。

「外れたわけじゃない、外したんだ。」

平野君が、重く、つぶやく。

「き、君はそんな乱暴な生徒では・・・」

「俺が学校で何人片付けたと思ってるんです・・・大体・・・」

「お前は前から俺のこと馬鹿にしゃがったじゃねえかあッ！」

「我慢してきた・・・俺はずっと我慢してきた・・・普通に生きていたかったから・・・ずっと我慢してきたんだアッ！・・・」

「でも、そんな必要なって無い、普通なんて何の意味もない！」

「だから俺は・・・殺せる・・・！生きている奴だつて殺せる・・・！」

「うおお、ひ、平野君、そんなことは・・・」

完全に腰が抜けたようで、声が引きつっている。

「毒島先輩、先に降りてください、僕が後衛を務めます！」

よし。じゃあ・・・

「石井君に卓造君たち、それに足首をくじいた君、・・・一緒に来ませんか？」

「・・・確かに、あんた達といった方が長生き出来そうだ」

卓造君達が立ち上がる。

それをきっかけにして、他の二人も立ち上がる。

「それに正直、あのバスにはいられんな」

彼も紫藤の狂気を感じ取っていたらしい。まあ、いい判断、でしようか。

バスッ、バスッ！

バスから降りた後、私たちは 奴ら に囲まれていた。しかも原作よりも多い・・・！

「毒島先輩、弾が切れますッ！」

「これを貸そうか？」

毒島先輩が木刀をかざし、平野君に見せる。

「肉弾戦はムリですう〜！」

涙声で答える平野君。

私もレッグホルスターに挿してあったUSPで応戦する。よし、7人。頭の中に何かの周波数が！

もちろんその周波数につなぎ、支援要請をする。

すると、二分もたたないうちにあの旋律が聞こえてくる。

「一箇所に固まって！」

・ 荘厳なホルンの音色。ワルキューレの嘲笑と呼ばれる歌詞。

・ 夕日を背に、空の騎兵が床主に舞い降りる。

UH-1が8機、OH-6が6機。そして、一機にはサーフボードが二つと、Death From Above（空からの死）のペイント。

「キ、キルゴア中佐・・・？」

やっぱり平野君はこの映画を知っていたようだ。

GAU-21、M134ミニガン、M60が 奴ら をなぎ払い、
M16の5.56mm弾が撃ち漏らした 奴ら の頭を貫く。

その光景は、まさに地獄の黙示録――

「つてあれ？」

中佐の攻撃が終わったあと、そこにはいつの間にか小室君たちが！

「小室君！無事でしたか！？」

「ああ・・・」

「で、全員集合したところで、どこに行きましょう？」

「このまま渡河して家族を探したいとこだけど・・・橋は封鎖されてるし、川も水位が増えて渡れそうにも無いわ」

高城さんが状況を分析する。

「じゃあ、もう今日はお休みにしない？」

「お休み？」

「あのね、使えるお部屋があるの！川沿いで、歩いてすぐの所！」

「彼氏の部屋？」

「ち、違うわよ！お、女の子のお友達の部屋だけど、仕事で忙しいから、鍵を預かって、お部屋の掃除とかしてるの！」

「ふうん・・・」

高城さんが先生を訝しげに見つめている。

「まあ、とりあえず、行ってみましょう」

「だな」

仲間も増え、一行は川沿いのメゾネットを目指す・・・

第五話 Death From Above (後書き)

あれ・・・最近コメディ要素全然無いぞ・・・？

あと、上陸阻止なら特科や重MATの出番だろ・・・っていう突っ込みはしないで頂けるとありがたいです。

P.S.

GAU-21ってのは、ブローニングM2を対空仕様に改良した奴です。

第六話く遭遇く（前書き）

- ・更新が遅れてしまいました・・・そして！ここで嬉しいお知らせが！
シュヴァルツさんの『学園黙示録と武器商人の男』と言う作品の主人公がこの作品に登場することになりました！では、お楽しみに・

第六話　遭遇

「20XX年某日」中東某国

「はぁ・・・！はぁ・・・！」

意識が覚醒する。

「武田！生きてるか？」

「ええ、何とか・・・で、ここどこです？」

「さあな・・・でも多分お前のせいだな」

「んなわきゃないでしょ」

「まあいい、指揮中隊！応答してください！」

「おお、左近か。今どこだ？こっちはとりあえず集合している」

「10式があつて良かった・・・位置データを送ってください。そこに向かって移動します」

「了解」

く川から程なくして、みなみけく

「ハンヴィー・・・それも軍用モデルだぁ・・・」

「ターレットまで・・・先生の友達っていったい何者なんでしょうか・・・」

「軍事オタクは黙ってなさい！さっさと中に入るわよ！」

くそして室内く

「さてと・・・」

と言うわけで早速2階へ。

「おや、風呂には入らないのか？」

「ちょっと気になっていることがありまして・・・先に入ってください」

「そうか・・・分かった」

というかあの中に紛れ込んで正気を保てる自信が無いです・・・

「では」

ガゴンッ！

「開いた開いた……」

「ナイツSR-25！いや、日本でそんなもの手に入る分けないし・
・じゃあ、AR-10を徹底的に・・ブツブツ……」

「あはは……」

相変わらず平野君の銃器愛には脱帽する……ん？

「ちよつと待つて」

「どうかしたのか？左近」

「ベランダに2、3個同じようなロッカーがある。ひょっとしたら
まだあるのかも」

「よし開けよう、すぐ開けよう！」

平野君が目キラキラさせながら言う。言われなくても……

ガゴンッ！

「……これは」

「M4A1、M82A1、ミニミニにミニミニの銃架……バイオのサ
ムライエッジ？」

M4A1を拾い上げる。

「凄い・・・ホロサイトにバーティカルグリップ、フラッシュライ
トにM203・・・フル装備だね・・・ん？」

「どうかしたんですか？左近さん？」

「ちょっと待ってこれ・・・SFGpの刻印がある・・・」

あとSAIGHFって刻印は何なんだろう？

「ってことは・・・！」

平野君が手早く他の銃器を確認していく。

「うん、サムライエッジ以外全部特戦仕様だ・・・」

「つまり・・・」

「ちょっと待ってくれ、僕をおいて話をしないでくれ！特戦って何
だよ！」

「あ、ごめん小室」

「特戦っていうのは陸自の特殊部隊だよ」

「へえ・・・」

「まあ、この武器はありがたくいただきますしょう」

「・・・」

「何をボーっとしてるんですか？弾込め手伝ってくださいよ」

「あ、ああ・・・」

カチャン、カチャン、カチャン、カチャン、・・・

「2人とも手馴れてるよな・・・」

「まあ、一応コミュニケーションが取れるくらい海外には行ってますし」――

その後、鞠川先生の乱入やらで大混乱となり、さつさと1階に退避したと思ったら・・・

「どうしたのだ？左近君」

「な、なんで裸エプロンなんですか！自分がかんりの美人って分かってやってます！？」

「君もかなり美人だと思うがな・・・」

「そついうお世辞は良いんです！とにかくですね・・・」

クドクドクドクドクド・・・わふー・・・

「ってそんなことを言っている場合ではなくてですね」

「？」

「ハンヴィーの定員は6人、今の私たちは13人・・・全然足りませんよね？」

「確かに」

「で、提案なんですけど、ここ私の家の近くみたいなので、平野君でも連れて家の車を取りに行きたいんですが・・・」

「分かった。早めに戻ってきてくれ」

「では、おい、平野くん！」

「そして左近家」

「平野、ストップ」

「どうしたんです？っていうか口調変わってません？」

「嫌な予感がする・・・まずは家の電話に掛けよう」

携帯を取り出し、家に掛ける。

ブルルル・・・ガチャッ

「・・・」

「敵の潜水艦を発見！」

「駄目だ！」

「で、私の家に何か御用ですか？というか何か何か仕掛けてますよね？」

「・・・分かった。今解除する。」

「平野君、後方を警戒」

「ラジャー
了解」

平野君と背中合わせで家の玄関まで近づく。

ガチャッ

扉が突然開く。

「ッ！」

思わず銃口を向け・・・

「ハッ！」

る前に投げ飛ばされてしまった。

「あたた・・・庭の罨と言いま今と言い・・・少し歓迎が荒っぽい
と思いませんか？」

「ええと・・・すまな・・・ん？」

「ところで、ここに溜め込んだ物資を・・・私の顔に何か付いて
ます？」

「弱音・・・ハク・・・だっ たっ けコレ？」

「！」

なぜそれを！？それを聞いたところ、意外な答えが返ってきた。

「転生？^{平行}ここみたいな世界からここへ？」

「ああ、つまり、そういうことだ」

驚いた・・・神がいるんだからパラレルワールドくらい普通にある
と思うけど。

じゃあ神の力が下がったのはこの人のせいなんだろうか？

「ところで、お名前は？」

「ああ、俺は、齋郷。 齋郷英樹だ」

「左近雪穂です。・・・齋郷？ってことはこの武器はあなたが？」

スリングで肩に提げていたM4A1を見せる。

「ああ、俺が置いていった奴だな」

「助かりました。では改めて、よろしく」

お互いに握手を交わす。

「ええと・・・平野コータ・・・です・・・」

——こうして一行の仲間に、『武器商人』が加わった……

第六話く遭遇く（後書き）

シュヴァルツさん、英樹の口調はおかしくなかったのでしょうか？

その他誤字脱字、文法におかしい所があれば、お気軽にどうぞ。

第六・五話　中東自衛隊（前書き）

このままだと、本編の進行に自衛隊がついていけなそうなので、

急遽6・5話を執筆します。

見通しが甘くて申し訳ありません・・・

第六・五話　中東自衛隊

「おお・・・？」

「妙に仕事が早いですね」

10式のデータリンクを頼りに進んで約一時間。

その頃には、施設科もないというのに、簡単な陣地が出来上がっていた。

陣地と言っても、鉄条網とテントの司令部、側方火器を配置する塹壕程度だが。

「左近！やつと来たか！」

「ええ！それにしても、よくこの短時間でここまでの陣地を作れましたね」

「ああ、それなんだが」

「どうかされました？」

「ああ、『^{エス}S』と中即連がいてな」

「『^{エス}S』に中即連？どうしてこんな所に？」

『^{エス}S』とは特殊作戦群の陸自内での通称で、第一空挺団で前身になる研究部隊が秘密裏に編成され、そのときの部隊のひとつが『^{エス}S』

という名前だったためだ。

「あいつらが言うには、演習中に地震がおきて、気づいたらここに、
って言う話だ」

「我々と同じ状況・・・ですか」

「ああ」

「ところで、今私達に出来ることは？」

「とりあえず車体の塗装をし直してくれ。ここは見ての通り砂漠だ」

「・・・ここはどこなんでしょう？」

「さあな。中東のどっかって言うのは見当が付いてるが・・・あと
で司令部に来てくれるか？」

「了解」

「さて、仕事仕事。黒川二曹、その車庫に入れてくれ」

『了解です』

〔陸自、仮司令部〕

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

ガチャッ

「左近三佐、入ります」

・・・・？空気が妙だ。

「おお、左近、来たか」

「そちらが？」

「中央即応連隊連隊長、山中将補と、特殊作戦群群長、明石一佐だ」

「戦車教導隊第二中隊長、左近和武二等陸佐です」

「演習での活躍ぶりは聞いているよ。早速だが、本題に移ろう。実はな・・・・」

「塗装は終わったか？」

「あつ！三佐！ええ、完璧です」

「それは良かった。早速出撃だそうだ」

「は？どこにです？」

「近くに何やらきな臭い街があつてな、強行偵察に出るとのことだ」

「それは偵察隊の出番でしょう？」

「事前に『^{エス}S』が偵察した所によると、T-72なんかもいるんだと。で、俺達に見て来いってさ」

「・・・まあ命令は命令ですしね・・・」

かなり嫌そうな顔だな・・・それは俺もだよ・・・ったく・・・

キュラキュラキュラ・・・

街まで約20キロ。履帯を傷付けないように時速30〜40キロで移動する。

「せめて普通科一班くらいつけてほしいもんですね」

「そついうなよ・・・さっさと行ってさっさと帰る。いいな？」

「了解いゝ・・・」

そうして着いたのは、映画『ブラックホーク・ダウン』のモガティッシュのような街だった。

何故か住人は一人もいない。

ババババババババ・・・

そう思っていると、どこからヘリのローター音がしてきた。

周りに敵がいないことを確認して、上空を見上げる。

「ブラックホーク、コブラ、チヌーク・・・いや、ありゃバトルだ！」

「そんな古臭いヘリとブラックホークを現役で使ってるのは・・・」

「ああ・・・間違いない。海兵隊だ。」

カーン！

敵弾が砲塔に当たる。

「危ねっ！」

そしてすぐに砲塔に引っ込み、車載センサーのデータを転送し、連絡を入れる。

「こちら左近、海兵隊だ！合衆国海兵隊がここに来ている！こつち

は敵対勢力から銃撃を受けた!」

「少し落ち着け・・・海兵隊? まあそっちは良い。銃撃だと?」

「ええ。いつRPGが飛んできてもおかしくありません。交戦許可を」

「焦るな左近。まずは全速力で戻れ。交戦の可否もそれから決める」

「了解」

「黒川、車体は気にせず全速力だ」

「はい」

ブロロロロロ・・・

空冷ディーゼルが唸りをあげる。

「行くぞ!」

〔陸自司令部〕

「さて・・・どうしようか・・・」

山中将補が唸る。

ドーン！

『司令部！敵が撃ってきた！射撃許可を！』

「ぬぬぬ・・・」

将補の顔の血管が切れそうなくらい浮かぶ。

「・・・クソッ！射撃許可！海兵隊と合流して共闘する！」

「了解！」

司令部を出て、10式に飛び乗る。

「よっし！武田！黒川！行くぞ！」

その後、将補が海兵隊と話をつけ、教導隊は目標の側面から奇襲をかけることになったが・・・

『左近！すぐに撤退だ！』

「どうしたんです、隊長！」

『米軍の特殊部隊が核兵器を見つけた！すぐ逃げるぞ！』

指揮下の部隊を率いて、撤退を開始する。そして・・・

「隊長、あの爆発は・・・もう避難はおそ・・・」

直後、戦車を引っくり返そうとするような爆風が襲い、意識を失う。

「・・・佐！三佐！左近三佐！」

「ああ・・・ここは？」

キューボラ
潜望鏡で周りを見渡す。

「ここは・・・床主市・・・」

「日本・・・なんですか？」

「どういことなんだ・・・？」

『三佐！前！』

「！」

そこにはT-72が！

「武田、撃て！」

「はい！」

こうして俺は日本の土を再び踏んだ・・・

第六・五話〜中東自衛隊〜（後書き）

パソコンがガムテだらけになりましたが、なんとか続きを書けました。

でも応急措置なので、更新は不定期になります。

気長に待っていただけると幸いです。

第七話　学園黙示録と二人の武器商人（前）　（前書き）

長くなってしまったので、前後編に分けてお送りします。

第七話　学園黙示録と二人の武器商人（前）

「武器・・・商人・・・？」

私の家にいた、私と同じように別世界から転生してきたと言う人――齊郷秀樹と名乗った――は、自分の職業を、そのように説明した。そういえば私がこっちに来たのも、RPGの不発だったつけ。なんだからキナ臭い。

彼も同じような目にあっただろうか？、と思ったので、ひとつ、質問をする。

「ここに来る直前、死にかけたりしませんでした？」

「ん？ああ・・・そういえば・・・」

「何か心当たりが？」

「ああ、ある街で、取引をしてたら、敵対組織に建物後と吹っ飛ばされてな。で、死んだかと思ったら、この街にいたってわけだ。いやあ、幸運だねえ！」

HAHAHAHA！と、妙にアメリカな笑い声でごまかすけど、心当たりどころの騒ぎじゃ・・・

「HAHAHA・・・いや、あっちのほうじゃ、結構日常茶飯事だよ？」

「・・・」

どんな街なんでしょうね・・・呆れて言葉も出ません・・・

「ところで、これからどうなさるんです？私たちはここにある車を取りに来たんですが・・・少し詰めればもう一人くらいは乗せられますよ？どうです、一緒に来ませんか？」

「ああ、それだったら乗ってきた車があるよ」

「じゃあ早速ガレージに」

ガラガラガラ・・・

「これは・・・」

ガレージにあったのは、父の持っていた高機動車と・・・

「・・・テクニカル？」

ピックアップトラックの荷台部分に、50口径クラスの機関銃をポン付けしたのをテクニカルといい、本物の装甲車の相手にはならないけど、紛争地帯だと結構貴重な戦力に・・・

「あのー左近さん？そのくらいなら僕も齊郷さんも知ってますけど・・・」

「ああ、すいません。すっかり説明癖が付いてしまって・・・」

「あれ、でも別にそんなことは無かった気が・・・」

「ト、トラックの荷台が余ってますし、少し食料でも運びませんかっ!？」

「そ、そうですね・・・」

そして30分程したころ・・・

「あのー・・・左近さん？」

「ふぁーい?らいひょうふれすよ?によってにゃんか、にゃいんれすよ?」

「駄目だこりゃ・・・」

「俺の車を引っ張ってくか・・・」

「お願いします・・・」

〔英樹視点〕

ブロロロロ・・・

なるべく音を立てないようにしつつ、街中を走る。

（PMCから武器商人に転職して、うまくいったと思ったら、今回の『転生』だ。まったく、ついてない・・・）

「ま、そんな事いつでも仕方ないか」

生前のコネはどういうわけか残ってるし・・・ヘリでも呼んで、ここから脱出すれば・・・

「齊郷さん、あの子供連れ・・・」

すると、太っちょのミリオタ（平野で合ってるはずだ）が奴らとやらの追われてる家族を発見した。

「今なら助かる。やるか？」

「全力で！」

「よし！Rock'n Roll！」

「それは僕の台詞ですう！」

「気にしない気にしない」

そういうわけで、久しぶりにひと暴れますか。

ダン！ダン！ドドドドド・・・

・・・とは言ったものの、奴らは大していなかったしな・・・
まあ、すぐ片付いた。

助けたのは、30前位の父親と女子小学生の二人連れだ。おや、左近さんが目を覚ましたようだ・・・

く英樹視点、終了く

「ん、うゝん・・・」

「あ、やっと起きましたね・・・」

「ん・・・ここはどこですか？」

「鞠川先生の友達の家ですよ。左近さんが酔いつぶれてる間に着いたんです。途中で親子も助けました。稀里さんって言っそうです。少し騒ぎすぎたんで、すぐに逃げますよ！」

「え、うん・・・でもどこに？」

「川の向こうに”良いもの”を用意したらしいです！行きましょう！」

「ふあ、ふあい・・・」

18人は川へ向かう・・・

第七話　学園黙示録と二人の武器商人（前）　（後書き）

誤字脱字がひどいかもかもしれませんが、追って直します。では！

七話、学園黙示録と二人の武器商人、（後）（前書き）

何か更新がローペースになってしまつて・・・申し訳ないです（汗

次は5日以内に出せるよう、頑張ってみます。

七話 学園黙示録と二人の武器商人（後）

バラバラバラバラバラ・・・

（しかし・・・ブラックホークとは・・・）

何とか川の向こうに辿り着いた私たちは、齊郷さんの用意した、
いいもの”・UH-60・ブラックホーク 2機に、ハンヴィーと
高機動車を吊って、高城邸を目指しているんですが・・・

『
』

「当機は全席禁煙、気分の悪い方は座席背面のエチケット袋にどう
ぞ」

・・・悪い予感しかしません。

ラジオから流れるエルビスの曲。

どっかで聞いたことのあるパイロットの台詞。

これはどう考えても・・・

～幕間～

バババババババ・・・

ん？どここのへりだ？まあ良い、どのみち我々は西側のへりなど使わないし、どうせ敵だろう。

「叩き落せ同志！」

ストレラで敵をロックオン、テイルローターに命中させる。

「よし・・・！」

「よくやった同志！次だ！」

二機いたうちの一機を落とす。もう一機が上昇しようとするが、すぐに当てて・・・

「ひiiiiiii！」

見ると、相棒が脱兎のごとく逃げ出していた。何があつた・・・

「ん・・・？」

「ウアァァアア・・・」

何だ、これは死体が、歩いている・・・？しかも、それが十何体も・・・！

「あ、く、来るな！来るなあああ！」

アッーーーーー！

く幕間、終了く

ピーッピーッピーッ！

「どうした！」

齊郷さんが叫ぶ。

「ミサイル！完全にロックされてます！」

「あきらめるな！チャフ・フレアー射出！」

「もうやってます！」

怒号の応酬。そして・・・

ガゴンッ！

「ブラックホークダウン！ブラックホークダウン！」

ですよねー！

「掴まれ！」

テイルローターを破壊された機体がコントロールを失い、墜落していく。

「もう一機は！？」

「すぐに上昇、敵ミサイルの射程から外れた模ようだあッ！」

「どうした!？」

「ひ、ひた噛みまひた・・・」

「・・・」

ズシャアアアッ!

ふう・・・何とか怪我はせずにすみました・・・意外と優秀なパイロットに感謝です。

「みんな無事か!」

齊郷さんが叫ぶ。あ、そういえば・・・

「みんなって、誰がいるんです?」

「誰って・・・」

齊郷さんが呆れた目で私を見る。

その後、酔いが抜けきらない頭で説明を聞き、どうやらこれまで行動をとにした、小室君たち七人がこのヘリには搭乗していたことを理解する。

「・・・よしっ。もう大丈夫です」

「やっと元に戻った・・・」

しかし・・・

「結構派手に音立てたし、 奴ら とやらは音に集まるんだろ？それに俺達を落とした連中との交戦も考えないといけない・・・人を撃ったことは？」

「ここにいる全員、もう人殺しよ」

皮肉っぽく高城さんが言う。

「おい、何もそんな言い方・・・まあ、否定はできないけど・・・」

「口論してる暇は無さそうですよ・・・！」

路地裏から、 奴ら が現れる。

「さて、 ”人殺し” といこうか・・・？」

齊郷さんが爛々とした目で言う。

さて、そして戦闘後・・・

「ん・・・？」

倒した 奴ら の中に、見慣れない格好をした人が一人。

「このマーク・・・！？」

赤字に黄色の交差した剣と一つ星・・・これは・・・

「こいつ、アル＝アサドの私兵じゃないか？」

！

「齊郷さん！？何でその名前を！？」

「ああ、言つとくけどシリアの大統領じゃ・・・」

「わかってます！クーデターで某国を乗っ取った、中東の権力者でしょう！？」

すると、齊郷さんが急に真顔になる。

「むしろこっちが聞きたい。どこでその名を？」

「どこも何もあれはゲーム・・・」

「何？ゲーム？何のことだ？」

「えっ？」

かくかくしかじか・・・

「つまり・・・カレド・アル＝アサドは、実在しているという事ですか？」

「アル＝アサドがゲームの登場人物？そんなことが・・・」

頭がどうにかなりそうだ！

「考えてても仕方ありませんよ・・・現実問題、アサドの私兵がいたからって、何だって言うんですか・・・」

「え、えーと・・・」

齊郷さんがなぜか変な汗をかいている。

「ちょっとあつちで一悶着あつてな・・・俺、アサドに死ぬほど恨まれてる」

「えー・・・」

「そんな目で俺を見るな！」

「ま、いいですよ・・・とりあえず、高機動車は・・・駄目ですよ
ね」

すると、パイロットが答える。

「ん？生きてますよ？」

私この人の能力を完全に見くびってました！

「い、いったいどうやって・・・」

「こう、落ちる直前にロープの接続を解除してだな・・・」

「この人一体何者ですか！」

「パイロットだろ？」

と、齊郷どん。

「パイロット以外の何なのよ」

と、高城さん。

「どこからどう見ても、ヘリパイロットですよ？」

と、平野君。

「はい、パイロットです」

と、当のパイロット本人。

・・・もう駄目だ、突っ込むとキリがないです・・・

「じゃあ、移動手段は確保できましたね。武器、弾薬はありますか？」

「弾薬はかなりある。ブラックホークに満載したからな。9 m
mパラ、フォーティファイブ45口径、5・56、7・62mm NATO、爆発物諸々。
高機に積めるだけ積もう。武器はヘリ備え付けのM16が何丁か・
」

「じゃあ、すぐに積みましょう」

「そして、作業中」

「ところで左近」

「はい？」

「俺たち武器商人は、自分の売り物に刻印をするって言う習慣があるんだが」

「私のM4A1にもありますね」

「さっきのアサド私兵の遺品に、武器があつた」

この前置きからして・・・出てくる名前は・・・

「・・・そして？」

「その武器に、その・・・刻印があつた」

「誰の刻印が？」

「・・・」

「齊郷さん？」

その名を口に出すのも憚られる、といった様子で、齊郷さんが、言う。

「Имран Захаев・・・イムラン・ザカエフだ」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.

七話、学園黙示録と二人の武器商人、（後）（後書き）

今回はシリアスとコミカルのバランスが取れていて、そこそこ良い出来だったんじゃないでしょうか？え？駄目ですかそうですか・・・

え？何？戦闘描写？何それおいしいの？

ちなみにこの小説は、8割が会話劇と謎解きと化しています。

では、次回もお楽しみにー

第八話　支援物資（前書き）

多分もう週一更新になりますかね・・・

第八話　支援物資

「ザカエフ・・・」

私が言うと、齊郷さんは語りだす。

「そう、東欧一帯を根城にする、死の商人だ。武器、乗り物、食料、傭兵派遣までやってやがる。扱ってる商品も俺とは桁違い。武器といえばAKから戦術核まで。乗り物といえばジープからフランカーまで・・・金さえ払えば何だって売る。あいつがバックについてるとなると・・・相当厄介・・・いや無理だ!」

なぜかわからないけど断言されました。

「ちょっと待ってください!何故に戦うんですか!今ははぐれたみんなと合流することが先でしょう!？」

「あ、ああ、そうだったな・・・」

「少しは落ち着きました?」

「ああ」

「じゃあ、続けましょう」

（約十分後）

ブーーン……

「C - 130?」

独特のエンジン音を響かせながら、C - 130が現れる。

「おっ！来た来た！スモークスモークと……」

スモークが焚かれる。

すると、C - 130から物資が投下される。

「何が入ってるんですか？」

「これだよ」

と言うと、投下された物資の包みをはがす。

「これは……なんですか？」

「俺の部下がある国の研究所からパク……借りてきた新型の対物ライフルだよ。FNのBRG - 15は知ってる？」

これまたマニアックな銃器が……

「西側版KPVになり損ねた銃ですよね？」

私が答えると、齊郷さんが見たことのない銃を取り出す。

「その通り。んで、これはそいつの弾薬を使えるように開発された

対物ライフルなんだよ。名前は対物ライフルの頭文字を取ってA M R - 15だ」

「おお・・・」

私はその完成度のため息をつく。刹那・・・

「おお！ナニコレ！新型の対物ライフル！？」

平野君が介入してきました。

「ああ、ちょうど良かった。これは君に渡そうと思ってたんだよ」

「ホントですか！」

ああ・・・平野君見ると和むなあ・・・

「よいしょつと・・・」

対物ライフルと予備弾を重そうに抱えながら、高機のほうに向かっていく。

「で、もうひとつが・・・」

「まだあつたんですか？」

「ああ、こつちも試作品の、ガトリング砲だよ」

と言って、重そうに引きずり出したのは、トレーラーにポン付けされた、やたら大きいガトリング砲。

「これって・・・航空機関砲じゃないですか・・・」

「いや、これも某国で開発中の牽引式ガトリング砲だ。電動の銃座にバルカンベースの20ミリガトリング砲が付いてる。操作要員は2名。装甲車くらいならどうにかなるくらいの威力はある」

「某国すごいですね！」

そこに痺れぬ憧れぬ！

「これで高城邸まで強行突破だ！」

「了解！」

・・・と、意気込んだは良いものの、結局 奴らは現れず、何事もなく高城邸まで着いたんですが・・・

（彼はアル＝アサドが実在すると、確かにそう言っていました・・・つまり、マクミラン大尉を呼んだつもりがCOD4全体をこの世界に投影してしまった・・・？）

これは大変なことになりそうですね・・・

く同じころ、床主市内のどこか

「なあジャクソン、ニッポンはサムライやニンジャが暮らしてんじやねーのか？どうしたってゾンビが歩いてんだよ」

「んなの俺に聞かんでください。それに、ベーカーの話じゃあ、暮らしてるのはメイドとかミコらしいですよ？グリッグス二等軍曹」

「まあ、今はとにかくほかの隊と合流しようぜ。弾薬も尽きてきた」

「ああ・・・」

T o b e c o n t i n u e d . . .

第八話〈支援物資〉（後書き）

これからはCOD4のキャラを多く出すと思います。

次回もお楽しみに。

10/8改

対物ライフルの名称を追加しました。

第九話　脱出

「つきましたねー」

「「「ああー」」」

気の抜けた声で全員。

「戦闘がないのは良いことなんですけどねー・・・」

「ここまで抵抗が無いとな」

「何か気が抜けるわね」

あれは明らかに>>奴ら<<が現れる展開だったでしょーに・・・

「さて、やっと着きましたけど、これからどうします?」

「ああ、今へりを呼んだ、一休みしたら脱出しよう」

「でもそれじゃ皆さんのご両親は...」

「それも問題ない。救難機を呼んでおいたからな。皆のご両親は俺が責任を持って搜索する」

「でも...どこに逃げるんです?」

と、平野君。

「>> 奴ら<<のいない離島とか、十分な食料を積んで船上生活とか、やり手はいくらでもあるでしょ！？…まったくこのデブちゃんは…」

「ほんとに仲がいいですね、お二人は」

「つな！バ、バカ言ってんじゃないわよ！私は…」

顔を真っ赤にして押し黙る高城さん。ホント、この人わかりやすいなあ…

「高城さんは小室一筋ですもんね」

「つひ、平野！？、アンタまで何言い出すのよ！べ、別に私は小室のことなんか…」

「俺がどうかしたのか？」

「絵に描いたようなツンデレですね」

と、外見にそぐわない発言をしたのはありすちゃんのお父さん。

「ええ、それと最近珍しくらしい鈍感男と来ましたからね、ありやあ絶望的ですね」

とは、齊郷さん。

「パパ、“つんでれ”ってなあに？」

「あ、ありす！？い、いやそれは…」

なんだか私たちのパーティも賑やかになってきましたね…

……

同時刻・床主市街地

「しかし、日本を離れてる間に、随分とメチャクチャになりましたねえ、二佐」

「ああ、ロメロは今頃大忙しだな」

日本に舞い戻ってきたと思えば、ガキのころ見たB級映画みたいになってるし、なんとか海兵隊とS、合わせて1個小隊と合流出来たは良いが、本部とは相変わらず繋がらないし、それは海兵も同じのようだし……

『ザー……こちらは第一飛行隊、菅生^{すけい}二佐だ！誰かいらないのか！』

「無線か……こちらは戦教二中、左近二佐、10式4両で移動中」

『了解、こちらが見えるか？』

とつさに双眼鏡を取り出す。

「っと……部隊章を確認。ブラックホーク4機、ニンジャ2機編成の編隊で良いのか？」

『左近二佐、それで間違いない。そつちはもう目標^{ターゲット}には遭遇したか

「？」

「ターゲット？何の事だ？」

『なんでも例のゾンビ連中のことをそう呼ぶそつだ。』

「ふむ・・・了解だ、今後連中は目標ターゲットと呼称する。こちらは何をすれば良い？」

『ああ、これから目標ターゲットの音響による誘導、及び殲滅作戦を行う。それで、そちらの協力を仰ぎたい。なあと、狩りと同じだ、こっちが誘導する目標を追い立てて、指定のポイントに誘導して欲しい。座標は今送る』

「了解、今行く」

・・・

「こちらは齊郷英樹さん。ここにくる途中で合流した…商人、らしいわ」

「憂国一心会会長、高城壮一郎である。で、私に話とは？」

「齊郷英樹と申します。この地域からの脱出を計画しておられるそうですね？」

「いかにも。少なくとも我々の屋敷に避難させた者たちだけでも、と考えているのだが…」

「私が全面的に協力しましょう」

バサッ。

机の上に地図や航空機の三面図が描かれた書類が積まれる。

「これは？」

「脱出に使用するヘリの図面、そして脱出計画です。」

「なんと…しかし、何故ここまで？」

「今まで散々商人やってきたんで、そろそろ慈善事業でも、と。…
実際こんな世の中じゃ商売上がったりなんですよ」

「わかった。君に任せよう」

「感謝します」

バラバラララ……

「どうやら到着したようですね」

・・・

しばらくして、齊郷さんが高城さんのお父さんと話をつけたようで、
すぐにCH-46がやってきた。そして…

「私たちは、暴力的な支配からの開放を要求します！」

「はぁ・・・」

何かデモが起こってましたよ…先頭でシュプレヒコールを上げてるのは、さっきキャンプに行った時しきりに人道的配慮とか、ボランティアとか言っていた女性だ。

「どうします？アレ」

「左近さんとしては随分ツンケンした物言いじゃないか？」

と、小室君。

「嫌い…いえ、反吐が出ます。ああやって、幻想に縋って問題を先延ばしにする連中は」

「気持ちはわからない事も無いんですけどね…」

と、平野君。

「……………」

相当憎しみのこもった目でデモ集団を見つめる齊郷さん

「どうしました？齊郷さん」

「…ちょっと、行ってくる」

「私も行きましょう」

「そうか？じゃあ付いてきてくれ」

・・・

「私たちはあ！責任ある大人としてえ！平和な方法で…なによアナタ？私たちは」

「搭乗の邪魔になる。即刻デモを中止しろ」

そういつて齊郷さんが拳銃を向ける。

「そう！アナタたちは！いつもそう！そうやってえ！暴力で！屈服させようとするう！私たちはあ！愛と平和の守護者としてえ！絶対にやめ」

ガアン！ガアン！ガアン！

齊郷さんが女性の足元に威嚇射撃を行う。

「やめると言っているんだ」

「ひ…」

「早く乗れ」

「……………」

女性は忌々しげにこっちを見つめながらへりに乗り込んでいった。

「さて、俺たちも乗ろうか」

「ええ」

夕焼けの中、へりは床主港へ向かう・・・

第九話　脱出（後書き）

ええそうです、スランプです。1ヶ月もお待たせして申し訳ありません。これからも細々とやって参りますので、どうか見捨てないでくださいお願いします。

十話 } C a l l o f t h e D e a d } (前書き)

長らくお待ちせしました、B - 2です。今回もお楽しみください。

十話 Call of the Dead

ババババババ……

齊郷さんの用意したシーナイトが向かった先は……

「わ……ワスプ級強襲揚陸艦!？」

「それに護衛にフリゲートまで……」

「ナンテコックタイノ(ハオハ)……」

と、役割(参謀役、もしくはリーダー)を高城さんと小室君に奪われつつある井豪くん。

「どうだい、俺の船は」

ワスプ級強襲揚陸艦は、タラワ級の後継として開発された揚陸艦で、エルキャック上陸用のLCAC3隻、戦車、装甲車、トラック、その他車両100両以上に加え、ヘリコプター42機を搭載、さらにV/STOL攻撃機の運用能力もある。その排水量は、2次大戦時の正規空母すら上回る。

「ミスター・サイゴー。お待ちしております」

「堅苦しい挨拶はいい。いつもどおりに行こうぜ?」

「Yes, sir Boss.ところで救難機でしたよね?」

「ああ、何が用意できた？」

「ペイヴ・ホーク、パイブロウが2機とパラレスキューが24名」

「十分だ。すぐに出発するぞ」

「それなら僕たちも・・・！」

小室君たちが名乗りを上げるものの、齊郷さんに却下される。

「ダメだ。ご両親を連れて帰る事を考える。そんなにへりに人は乗らない。心配しなくても俺が必ず連れて帰る」

「だけど・・・！」

「たしかに彼のいうとおりよ小室。ここは任せるしかないわ。」

高城さん達に説得されて、どうにか踏みとどまったようですね。良かった良かった。

「でも・・・ガイドが必要だな。ペイヴ・ホークに一人か二人」

「私と平野君、小室君でどうでしょう？」

「じゃあ、君と平野君が2番機に。指揮は君に任せるよ」

「ありがとうございます」

「よし、行こう」

「はい！」

そして2番機に行くと、

「こんにちはー、エルビスは最高ですよね？」

「操縦あなたですか！」

ま、腕は折り紙つきですが・・・

・・・

ババババババ・・・

ブリーフィングの結果、搜索するポイントは、床主東署、新床第三にいどし小学校、タイエー床主店の3つに絞ることに。そして今向かっているのは床主東署です。

「>>奴ら<<は動く死体です。FLIRで体温を確認して下さい」

フリアー
FLIR・・・赤外線前方監視装置は、体温のある（つまり生きている）人間を映し出す。

「了解・・・ダメだ、いないね」

「そうですか・・・小学校には2番機が向かっています。モールに行きましょう」

「りょーかいつと」

.....

「悪いねヴァスケス中尉、所属が違うのに付き合わせてしまつて」

「いえ中佐、我々は日米同盟に則つて行動を共にしています、当然のことです」

「そうかね？ だったら良いんだが」

彼はヴァスケス中尉。合衆国海兵隊、武装偵察隊第一小隊の指揮官だ。フォースリーコン

性格は軍人の鑑とも言える様な性格で、多少カタい所もあるがそれも相まって指揮官としてはうってつけの人物と言える。

「それでな、言つてやつたんだ、『お前だつて陸自じゃねえ』つてな！」

「そいつぁ傑作ですな！」

そしてその反対側で海兵隊員と談笑しているのが、『エスS』こと特殊作戦群第五小隊の指揮官、青野三尉だ。

彼はグリーンベレーで訓練を受けた相当優秀な指揮官らしいが、生まれつきの性格からなのか、へらへらとしてどこか危なっかしい感じがある。もちろん隊員達は彼の能力を信頼しているし、俺だつて相当優秀な人物だと思つ。つまり信頼できないのは『能力』ではなく『人柄』なのだ。

そしてさつき青野三尉と談笑していた二人が、ジャクソン軍曹と、グリッグス2等軍曹。グリッグス2等軍曹は、何故か裸で、その上からボディーアーマーを着ている。ジャクソン軍曹は無口だが、中尉曰く、「優秀な軍人になる」とのことだ。聞いた話によるとジャベリンの射手を任されているらしい。

だが、合流できたのは約40人。^{「エス」}が17人に武装偵察隊が25人。何百人・・・いや、何百体の目標^{ターゲット}を相手にするには・・・

「この人数では足りないと思うんだが」

「我々以外ならば、そうでしょう」

そうだな・・・嘆いても始まらん。

「よし、行こう」

戦車と歩兵の一個小隊は床主を駆けけ

「それにしても二佐って英語話せたんですね」

と、失礼な発言をする武田二曹。

「いくら俺が部下の失言に寛容な上官だからと言って、今のは聞き捨てならんな。というか俺の英語力がどれくらいだと思ってたんだ」

「ん、ロシア語で道聞かれて『I can't speak English.』って答えるくらいかと」

「何おう！？武田あ！お前は減給だ！給料１０００円カットだ！」

「ひいい、勘弁してくださいよぉ」

もちろんそんな事は出来ない。だが、こうでもしなければ潰れてしまっただけ、実戦は俺達を疲れさせていた。

十話 } C a l l o f t h e D e a d } (後書き)

オリ展開になると話を考えるのが大変ですね。申し訳ないですが月1ぐらいのペースで更新したいと思います。

十一話 CODE:TRIPLE SIX DELTA (前書き)

固有名詞をそのまま出している所があります。わかりにくかったら一言お願いいたします。

十一話 CODE:TRIPLE SIX DELTA

モールに到着した私たちは、パラレスキューの安全を確保するためにパイプホークから狙撃をしていた。

「給水塔右方、100m、無風」

「了解」

ドオン！

私が観測手、平野君が射手を務める。射撃に使うのはこの前渡されたAMR-15だ。

「反動はどう？」

「重量とガス圧作動のおかげで軽いですよ。あくまで他と比較してですけど」

そうしてしばらく狙撃を続ける。

「階段脇、150m、西に風速2m」

「Good Night」

ドオン！

「ビューティフォー・・・さすが平野君」

屋上にいた>>奴ら<>は大体排除されたので、降下したチームに安全確保の旨を伝える。

「タンゴ21、こちらスーパー61、脅威は排除した。すぐに降下されたし。オーバー」

『了解スーパー61。グリーンライト！GO！GO！GO！』

ペイブロウからパラレスキューが降下していく。

「じゃあ私たちも行きましょうか。着陸させてください！」

「あいよー」

ペイブホークの高度が下がり、屋上に接地直前でホバリングする。

「じゃあ平野君はチーム2の案内を」

「左近さんも気を付けてくださいね」

今回のミッションは二手に分かれて生存者の搜索、その後回収という流れになっている。私はワスプで選んだ装備をもう一度確認する。

ユニフォームはACUの上下にCIRASアーマー。コンバットナイフの代わりに銃剣を左胸に装着し、腰には>>奴ら<>の感覚を狂わすためにフラッシュバンを持ってきた。左腿のケースにはガスマスクが収まっている。携行品にバラつきがあるが、チームメンバーの装備も大体同じだ。

メインアームはレミントンACR。

元はマグプル社でM A S A D Aという名称で開発され、その後マグプル社がブッシュマスター社に各種ライセンスを売却し、さらに同じファンドの傘下にあるレミントン社が参加し、現在はブッシュマスターがセミオートオンリー、レミントンが軍用のセレクトタイプ・ファイア・モデルを製造している。

過去のアサルトライフルの長所をうまく配合し、高い性能を誇るが、F N S C A Rや、H K 4 1 6など、他の大手企業製品に比べると見劣りすることから、制式採用している国は無い。

私が使うのは5・56mm弾モデルで、予備マガは8つ。マガジンにマグプル、銃のレールにはE o T e cホロサイト、バーティカルフォアグリップを装着してある。

サイドアームは、左はC I R A SにP A L Sウェビングで取り付けたホルスターにP 2 2 8、右のレッグホルスターにコルトガバメントを選んだものの、今の私にガバは少し取り回しづらい。あとで齊郷さんに改造してもらおう。

「チーム2が生存者を発見したそうだ」

チーム1の隊長が私に言う。チームの隊員は多くがアメリカ人だが、全員が数力国語を話し、流暢な日本語も話せるので、私も日本語で意思疎通を行っている。

「じゃあ私たちも早くここを出て・・・」

ウォーオン・・・

「いやな予感がするなあ……」

ワンッ！ワンッ！ワンッ！ワンッ！……

遠吠えに続いて、ジャーマン・シェパード、シベリアン・ハスキー、ドーベルマン……軍用犬に使われる大型犬がここから30mほどの距離を置いて、2、30匹ほど飛び出してくる。さらにその奥には人影が見える。

「50m前方にブリーダーが！」

私は報告しながら犬の一匹に狙いを定める。

「了解だ！SAWガンナーは制圧射撃！犬を近づかせるな！」

「Copy that！I'm shoot'em！」

隊長の命令でSAWガンナーがミニミを伏せ撃ちで射撃し、他のライフルマンも立射やひざ撃ちで犬を撃つ。

「マークスマン！ブリーダーを殺^やれ！」

「了解！」

SR-25を装備したマークスマンが犬に指示を出しているだろうブリーダーに狙いをつける。

ドオン！ドオン！ドオン！

こっちでは隊員の一人が背中に背負っていたベネリM3・スーパー

90で犬を射撃していた。

バスッ！

サプレッサーの付いたSR-25は、銃が風を切る音と、キーンというボルトの作動音しか発生させない。

ワウッ！？

ブリーダーを失い、統率の乱れた犬に向かって、一方的に射撃を加える。が、一匹を取り逃がし、隊員の一人に跳び掛ってしまう。

「助けてくれ！」

彼は銃を犬に噛ませ九死に一生を得るも、犬にマウントをとられ、こちらから射撃を加えると射線がかぶってしまう。

そこで私はとつさに銃剣を抜き、犬のうなじに突き刺し、そのまま喉まで切り下げる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、助かった。まさに女神の助けってやつだな。いや、戦乙女フルキューレか？」

違いない、という声が周りから漏れ、空気が和む。

「まったく・・・死体を検分しますよ」

私達はブリーダーのほうへ向かう。

「これは・・・」

「おいおい、コイツぁ・・・」

事実からいうと、そこには>>奴ら<<、つまりゾンビ化した人間がいた。

そう。ブリーダーは>>奴ら<<だった。詰まるところ、それは>>奴ら<<に知能が芽生え始めているということだ。しかもペットシヨップの犬を3日とたたないうちに手なづけ、手下として使っているところを見るあたり、動物的なものも持ち合わせているらしい。

「犬とこのブリーダーを撮影しておきましょう。これは早く帰って報告しないと」

「そうだな。おいダン！写真を撮れ」

「あいよ」

どこか気だるげな雰囲気を漂わせた隊員がブリーダーと犬が写った写真を数枚撮る。

「今度こそチーム2と合流して、帰りましょう」

私は言う。

「もう屋上にペイブローを待たせてある。さっさと帰るぞ。H o o - a h ?」

「Hoo - ah」

「Hoo - yah」

「Oo - rah!」

海兵隊員は今日も元気です。

・・・

モールの屋上に行くと、ペイブロウ2機が接地しつつホバリングしていた。

「ああ、左近さん、齊郷さんから無線が来てますよ」

平野君がヘッドセットを渡してくれる。

「ああ、ありがとうございます」

すると、平野君に腕を絡めている女性――（婦警さん？）が私をにらむ。

「コータさん！この人誰ですか!？」

「あ、あさみさん、左近さんはそっこのじゃ・・・」

どうやらこつちが犬と戯れている間に平野君には春が来ていたらしい。

「平野君、おめでとございます」

すると、婦警さんが顔を赤らめてもじもじします。

「いや、あさみとコータさんは別にそんなんじゃない・・・」

こっちのバカカップルは放っておいて、無線に出る。

『こちら齊郷。聞こえるか?』

「こちら左近、良好です」

『よし。良い知らせが二つある』

「じゃあ一つ目からお願いします」

『わかった。まず一つ目だな。小学校は問題ない。自衛隊が救出に来るらしいから、こっちはそちらの関係者だけを保護して帰るだけだが、宮本さんのお父さんが、「不測の事態に備えて、自衛隊が来るまでここを離れない」と言ってたんで、しばらくこっちに残る』

「わかりました。二つ目は?」

『ああ、あんたらの一行に鞠川さんって人がいたろう?あの人の知り合いが床主空港に取り残されてるらしいから、シーナイトが向かってる。そっちのペイブロウも回収に向かってくれないか?』

「わかりました。そっちも早く戻ってきてくださいね」

『勿論だ。いつたい俺を誰だ——』

ザアアー・・・

そのとき、眩い閃光が床主を包み、無線が切れる。

「まさか!？」

私はこの現象に見覚えがあった。

十一話 CODE:TRIPLE SIX DELTA (後書き)

数時間前

大統領専用機 VC-25

コールサイン”エアフォース・ワン”機上

アメリカ合衆国臨時大統領、元国土安全保障長官

空飛ぶホワイトハウスと呼ばれ、合衆国中の情報が集まるはずのこの機体は、現在ほぼ完全に外部との情報が遮断されていた。

ミスタープレジデント
「大統領閣下。どうか、ご決断を」

整備班がストを敢行していたのなら、まだ良い。だが、こちらからコンタクトが取れないのではなく、あちらからの反応が無かったのだ。

「むう……」

「洋上のジョージ・ブッシュも、シャイアン・マウンテンとも連絡が取れません。……ここも、長くは持たないでしょう」

「だが、しかし……」

統合参謀本部議長の強硬な意見に私は難色を示す。

「我々がやらねばいけないのです！今のうちに国家非常事態作戦規定トリプルシックスデルタを発令し、合衆国の、合衆国民の敵を打ち砕かねばならないのです！」

そんなことはわかっている。私がやらねばならない。それは・・・
わかっている・・・！

ミスタープレジデント
「大統領閣下！・・・私も、あなたも、もう噛まれているのですよ？
？そうすることではしか国民への責任を果たせない。・・・やるしか・・・
ないのです・・・！」

議長も言いたくて言ってるわけではないだろう。彼はアフガン派兵で疲弊したアメリカのために、私が選んだ平和路線にずっと協力し続けてくれたのだ。

「わかった。日本海のオハイオと残っているミサイルサイロに連絡を。現時点を持ってコードトリプルシックスデルタを発令する。・・・主よ。我々を赦し給え。」

第十二話 全てが終わり行く世界で (前書き)

前々回サブタイのコール・オブ・ザ・デッドってホントにあったんですね。

第十二話　全てが終わり行く世界で

「まさか!？」

私はこの現象に見覚えがあった。そう、これは・・・

「EMP!？」

EMP、電磁パルスとは、高高度核爆発によって起こる現象で、核爆発によって生じた電磁波が、電子機器のケーブル、アンテナに過剰な電流を発生させ、電子機器を使い物にならなくしてしまうものだ。

「通信と操縦系統は!？」

私はパイプロウのパイロットに詰め寄る。

「機器はシールドされてますから問題ありません。操縦は油圧なんですEMPは関係ないですね」

パイロットが冷静に答える。

『ザー・・・』

そう言うなり無線にノイズが入り、通信が入る。

『こちらはワスプ!タンゴ21!応答せよ!聞こえないのか!？』

「こちらはタンゴ21、左近です」

『Thank God・・・あなたか。ミサイルの発射を確認後、ワズプを沖合いに退避させていたためミサイル発射の連絡が出来なかった。すまない』

「いえ、過ぎたことです。それにしてもあれはどこから？」

『それも帰ったらまとめて説明する。このまま床主空港へ向かってくれ。こっちからもシーナイトが向かってる』

「了解。通信終わり」

どこから撃ってきたものやら。世界はもう終わりかけてるというのに、せつかな国もあったものですね。

「燃料は足ります？」

「それが・・・空港で人員降ろしてまた乗せるほど残ってないですね。ほぼビンゴです。スーパー61ならまだ余裕があるはずですが、どうだ61？」

ちなみにビンゴというのは航空無線の用語で基地（この場合はワズプ）に帰還できる最小限の燃料があるという意味がある。ちなみに余裕がある場合は決められた数値に従って、『○○1、ベース+25』などと言う。

『全然余裕ですよ21。どうやら聞いた話によると病人もいるそうじゃないですか。戦闘要員はこっちで乗せますから、早く帰ってください』

と、スーパー61。

「了解。ありがとよ61。帰ったらなんか奢るぜ」

「ちょっ、それ死亡フラグ！」

このパイロットは素でなんて事を言いやがりますか！

「Shiboufrag?どんな旗だい？」

「ああもつまたく・・・じゃあ戦闘要員はペイブホークに分乗します。屋上に降りてください」

まったく堪ったもんじゃないな、と一部が愚痴りながらペイブホークに乗るため10人ほどがペイブロウから降りる。

「えーと、僕は・・・？」

平野君が聞くが、私はそのまま残るように言い、そのまま私はパイロットに発進指示を出す。

「さて皆さん、これからもう一回空港の屋上にファストロープです。気力は持ちますか？」

「生憎と、そんなヤワには出来てないんでな」

チーム1の隊長が答える。

「じゃあ行きましょう、乗ってください！」

―雪穂達が空港へ向かった数十分後、モール―

「菅生二佐！いったい何がどうなってるんだ！」

「わからん！とりあえず電装系は生きてるか！？」

「砲安定装置と自動装填装置がお釈迦になりかけだ！これからどうすればいい？」

「予定に変更は無しだ。と、言いたいところだが、その先に敵影。戦車も見えるぞ」

「了解。・・・2号車、ここは任せるぞ。3号、4号、付いて来い！」

『ちよつ、隊長！』

海兵と『^{エス}S』の支援は2号車に任せ、敵戦車に向かって俺は猛進する！

「前方600敵戦車3、小隊行進射！射^てえっ！」

3両の10式が一齐に火を噴き、同じく3両の敵戦車はそのあだ名通りびつくり箱のごとく砲塔を飛ばし、爆散する。

「目標変換、右200装甲車、弾種変更対榴！俺の獲物だ、射^てえっ

「！」

HEAT-MP

多目的対戦車榴弾の直撃を喰らった装甲車はエンジン部分から火を噴いて、随伴歩兵に破片を撒き散らしながら木っ端微塵になる。

「右に敵だ！2号！お前のところから狙える！」

C4I化された10式的能力を使えるうちにフルに使い、モールへの道をひた走る。

「すげえ・・・」

海兵隊員の一人が感嘆の声をあげる。

戦闘中、銃火の飛び交う中でそう言わせるほどに凄まじい進撃だった。

- - - - -

「Cease fire！Cease fire！」

しばらく交戦し、敵影も見えなくなってきたというのに制圧射撃を加え続ける隊員を見かね、ヴァスセス中尉が叫ぶ。

「ふう・・・終わったか」

グリッグスがため息をつく。他の隊員も同じように脱力している。

『一応これで予定に変更は無したが、結構派手にやらかしたな』

菅生2佐が半ば呆れ調で言う。

「ところでさっきのは何だったんだ？」

左近は菅生二佐の言葉を聞き流し、疑問をぶつける。

『ああ、アレだな・・・』

・そして、床主空港・

「おいおい、何だありやあ、冗談じゃないぜ！」

チーム1の隊長が怒鳴る。

彼が声を張り上げるのも無理は無い。

なぜなら、床主空港（の滑走路）にいたのは、

見渡す限りの>>奴ら<<、>>奴ら<<、>>奴ら<<。

おそらく数万は下らないであろう、地上を埋め尽くす>>奴ら<<。

「これは・・・どうでしょうか？」

「どうしたもこうしたも、さっさと空爆でもしないことにはおちお

ち救助もできない!」

「空爆って・・・ワスプにはハリアーもF-35も無いでしょう」

「そりゃあそうだが・・・」

近接航空支援ねえ、と思ったところでそういえば、と今更ながら自分の能力を思い出す。

そうだ。AC-130出せば良いんだ。

「シーナイトは今どこに？」

パイロットに聞く。

「LZ（着陸地点）があれですからね、しばらく別のところに退避して、空港施設の人間への交信を試みるそうで」

じゃあ遠慮は無しか。存分にやってもらおうとしよう。途端、私の無線に交信が入る。

『こちらはAC-130、ウォーハンマーだ。高度4000にて周回飛行中。攻撃する座標と射撃禁止区域を指定してくれ』

「了解。座標、3、アルファ、4、エックスレイ。デンジャークロース。空港施設への攻撃は禁止。中には民間人がいる」

デンジャークロース（Danger close）とは、友軍から600メートル以内の標的に対する支援砲撃および爆撃を指す言葉である。要するに味方に当たっても構わないから撃ってくれ、とい

う意味の指示であり、

『座標了解、射撃。細かい着弾地点は・・・ああ。すまない』

「今のは近かったぞ！」

至近弾や誤射誤爆はよくあることである。だが、たとえ一発だけであつてもそれは祖国である。

航空優勢下でのAC-130はまさに水を得た魚。M102 105mm榴弾砲で>>奴ら<<を面で叩き潰していき、空港施設付近の敵はGAU-12 25mmガトリング砲でちまちまと（といっても着弾のたび>>奴ら<<が数体まとめて吹っ飛ぶわけだが）倒して行く。

「俺らがいちいちヘッドショットしてたのがアホらしくなるな」

と、チーム1隊長。確かに最初から出しておけば良かった。

- - - - -

AC-130が10分ほど空港を火砲で耕したところで、パイプホークが空港施設の屋上でホバリングし、さながら総火演の後段演習後のようになつた滑走路を眺めつつ降下する。

「Down rope! GO! GO!」

ちなみにファストロープは特別な器具などを用いず、単純に握力だ

けでロープを握り、降下する技法なので非常に危険です。ブラックバーン上等兵のようにならなくては、良い子の皆さんは元陸自レンジャーなどの経歴を持つ教官の指導の下、リペリング等を習得してからトライしましょう。

そして10人全員が無事に降下し、屋上のドアから下層に下りる。

「シーナイトによれば交信は確認できんらしい。おそらくEMPで機器がやられたんだろ。2手に分かれて探すぞ」

といったその時、

「そこに誰がいるのか!？」

芯の強そうな女性の声と、

「話し声って事は連中じゃなさそうだな・・・いや、喋るのもいるのか? だったらやりにくいなあ・・・」

少々気の抜ける男性の声が聞こえる。二人とも若い声だ。

「あんたらは!？」

チーム1隊長が声をかける。

「私はSATの南リカ! そっちは?」

「俺はデルト・・・いや、サイゴー社のサンダーソンだ。あんたらの救助に来た」

「だから言つたろ？あれ救助ヘリだろつて。よし、俺の勝ちなんだから揉ませるよ」

「賭けに負けたんじゃ仕方ないかなあ・・・」

この世界の住人には話を聞かない人間が多いようだ。というかその名前どこかで聞いたような・・・

「ひよつとして鞠川先生のお友達なの？」

その一言でリカさんの雰囲気ガラツと変わる。

「静香知ってるの！？今どこ！？」

「落ち着いて、落ち着いて。私たちのところで保護しています。ヘリを手配したので乗ってください」

「ちゃんとここの全員分あるでしょうね？」

「もちろんです。で、何人ですか？」

救助用に向かったのはCH-46が5機だったが、結局1機で足りた。話によると>>奴ら<<が突然大量に現れ、SATや税関は駆逐が不可能と判断し、生存者を連れて行けるだけ連れて施設に立てこもったらしい。

そうしてシーナイトとパイプホークは無事にワスプに帰艦した。

- - - - -

「なんですって!？」

ワスプに帰艦した私たちを待っていたのは、限りなく悪い知らせだった。

ミサイルは中国からだった。それは別に良い。重要なのは次だ。

小学校に向かった齊郷さんとの連絡が取れなくなった。彼に限って万が一ということは無い・・・はずだ。

「それで、どうするんです？」

何が起こったか確かめるにしても、部隊の派遣は急務だ。

すると、私にこのことを伝え、最初この艦を訪れたときペイブローウの用意までした齊郷さんの副官的な存在であろう男は、ニヤリという擬音がどこから聞こえそうな顔で答えた。

「ボスが困っているなら、助けるのは道理つてものでしょう?。」

第十二話　全てが終わり行く世界で（後書き）

なんてこったい、もう二ヶ月近く経ってるじゃないですか・・・！

遅筆すぎて泣けてきますよもう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5933s/>

軍事オタクが地獄を歩く

2011年12月5日18時52分発行